

おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

令和6(2024)年
8月号
通巻648号
毎月23日発行
(題字 矢追日聖)

★発行日 令和6年8月23日
★発行所 大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町1の12
☎(0742)45-1192
★印刷 大倭印刷製
★定価 1部 300円
年間購読料3,500円(送料共)
★郵便振替 01050-6-67002
大倭出版局
URL <http://www.ohyamato.jp>



夏雲 青山美子都さん撮影 (文・8頁)

私とおおやまと 30年の時を超えて (当時と現在) <第2回>

先月号に引き続き「私とおおやまと」の企画を続けます。法主様が心を動かされた文章と今の思いをじっくり味わってください。(編集部)

沈黙のネットワーク (再録)

長崎県西彼杵郡 安藤 勇

大倭を離れてから十何年かが過ぎようとしています。浮世のしがらみにこずき廻されながら、俗世間を辛うじて泳いでいる今では、大倭のことはほとんど封印されたも同然の日々です。

けれども、又、別の意味では、普段全くの音信不通でありながらも、依然として私は大倭の磁場に捕らえられたまま、その引力圏を浮遊している存在でもあります。

もう少し正直に言えば、私は今でも「奈母太加天腹」の呪縛から逃れられないでいるのです。呪縛というのは、勿論正確な例えではありませんが、ある種のマインドコントロールを受けているようなものだと言えば、より近い意味になるかも知れません。皆さんにもきつと覚えがある事でしょう。

大倭には、こうした言わば、沈黙のネットワーク、とても呼ぶべきものがあって、一度でも足を踏み入れた者には知らず組み込まれてゆくような見えないシステムがあるのかも知れません。このような精神世界に於る重層的なネットワークに、いつどのような形で点火のスイッチ

が入り、システムが起動するのか、あるいは起動しないのかは、当然のことながら知る由もありません。けれども、時が至れば、大倭は、キーステーションとしての機能の発現を見るに相違ないと思われるのです。

単なるオカルトではなく、ましてや幻想や狂気でもなく、こうした不可視の領域に就ての科学的な解明が、誰にでも解る形で訪れる日が早く来ればいいのと願わずにいられません。

大倭での数年間に渡る生活の中で、自分なりに把握した有形無形の教え、体験、理解、あるいは誤解が今は表面に出ることなしに沈潜していません。豊かな伏流水としての側面はあるものの、社会に対してはまるで有効に生かされていません。

これではネットワークの一員たる資質が問われるばかりです。力を秘めての沈黙ならいいのですが、何もしないで永眠というのではシャレにもなりません。どこかでターニングポイントを越える必要があります。その意味で、大倭五十年というのは節目としても大きなチャンスです。心して本当に有効な手だてとして役立てたいものです。

霊波は常に放射されている訳ですから、問題は受信機であるこちら側にあります。ネットワークが本来の機能を発揮できる様、システムをシステムとして立ち上げてやるのがこれから必要な事ではないでしょうか……。などと自分でもよく解らないことを書いてしまいました。これも大倭の陰の信者からのエールであるとお汲み取り下さい。

そんな時代もありました(現在)

—レリーフ作業小屋昔話—

平成6年1月号の私の記事を読みました。汗顔の至りというか、忸怩たる思いでいっぱいです。私の中では、ネットワークは何ら発現も機能もし

ていません。沈黙したままで。なので、原稿依頼の趣旨とは離れるのですが、代わりに四十数年前の昔話を少し書かせて下さい。

■日元さんのこと(※青山日元さん)

当時、菅原園の前にレリーフという、コンクリート製のタイルを作るプレハブの作業小屋があり、私はその2階に住んでいました。住み始めた頃、物置きガラクタやらワラなどを片付けていたところ、日元さんの大きなカミナリが落ちました。「勝手なことをするな」というわけです。

それでもその後仕事の合間にお茶を飲みながら、四方山の話をしてくれるようになりました。「日本を救う人を探すんだ」という思いに始まり、4本の樺柱にムシロを吊り下げただけの掘っ立て小屋で、冬には寝ている顔に粉雪がかかり、鏡池のカエルやカラスノエンドウのお茶で凌ぐような暮らし。「10年経ちました、と一口に言うがそんな簡単なものではなかったです」と日元さんは振り返ります。「ある時、法主さんから『ワシらは捨て石ぞ』と言われた言葉が心に残り忘れられません」と、言いました。

■景山さんのこと(※景山高義さん)

景山さんはハンセン病の回復者です。普段は穏やかで静かなんですが、公権力に1人で立ち向かって来た激しい人でもありました。一時期プレハブの2階に住んでいました。

岸田さんや須川さんたちと「交流塾」をしていた頃、富増さん(旧姓)と「米はどれぐらい要るかな、塩は、ミソは……」とおにぎりを作る相談をしていると、突然景山さんが入って来て「オレのことはかまってくれな」とひどく怒って言うのです。とんだ誤解です。訳を話して勘違いは解いてもらいましたが、ベニヤ板一枚でこちらの会話が筒抜けだったようです。

私と景山さんと昇ちゃんとの3人の時もありません。三人三様の三つ巴です。昇ちゃんはストレスが溜まると、奇声を発して床を踏み鳴らし壁をたたくのです。隣は景山さんです。一体どうなることかとヒヤヒヤするのですが、何事も起きません。景山さんは国家権力とは喧嘩しても、昇ちゃんと揉めることはありませんでした。分別と理性の人でした。

理由は知る由もないのですが、ある時ひどく激昂して、私物を洗いざらい宿禰館裏にプチ撒けて出て行ってしまいました。炊飯器にはご飯が残ったままです。ハサミが刺さっていました。身障者手帳もあつたと思うのですが、あれは一体どうなったのでしょうか。

■昇ちゃんのこと(※中村昇次さん)

昇ちゃんは話すことが出来ません。コミュニケーションは怪しい手話だけです。岸野さんによると、本当の手話ではなくて自己流混じりのものだったようですが、諸々の手続きやお金の管理は岸野さんの世話になっていました。私と同じ一門の端くれで、食事は教母さんの賄いで外出も自由にしていました。大倭にも馴染み、ある意味邑のマスコットの存在でした。少しは文字も書けたので、晩の食事が要らない時は食堂にある小さな黒板にチョークで「日本は休みです」と書きます。日本と本日が逆になっているのですが、本人は澄ましたものです。思わず笑えるエピソードでした。

■杉本仙タンのこと(※杉本仙太郎さん)

杉本さんはレリーフの仕事仲間です。日元さんとの縁で大倭に来て境内の池上団地に住んでいました。無頼の生き方をしてきた人のようで、気に入らない事があると短刀を持ち出して河内弁で脅します。銃刀法違反ですね。

体調を崩して入院した時には私が付き添いで行

きました。オムツを素手で洗ったり、タンの吸引を一晚中していたので、看護婦さんたちからの受けは良かったです。タンの吸引は今ではさせてくれないでしょうね。医療行為にあたるでしょうから。屋上から畝傍山が見えました。どこの病院だったのでしょうか。

そんなわけで、いろいろな事がありました。景山さんと昇ちゃんのアたりでは私の記憶に少しズレがあるかも知れませんが、レリーフの2階にいた頃は人の出入りも次第に多くなって集会所のようでした。相手変われど主変わらず、という状態で、たまたま「居留守」と書いた紙をドアに貼って見逃してもらいました。冬はとても寒く、昨夜飲み残したお茶が朝には枕元で凍っていたことなどを思い出します。

大倭での生活は、味の世界のほんの一端を体験させてもらったに過ぎませんが、紛れもなく私の原点であり、核であり、青春そのものでした。なかなか短く短い間ではありましたが、法主さんの訾に接することが出来たのは、無上の僥倖であり稀有な事で、感謝の言葉しかありません。つまるところ、それぞれがそれぞれの場所で咲けば良いのだと思います。

さて、終活に近付きつつある今、「大倭の恩寵と呪縛」に任せて余生を眺みつつ、「去来するもの大小紅白」の一塵足り得たことを本心から喜びたいと思います。本当にありがたうございました。

「黄泉帰り 振り返りみて 今永遠に」

人間臭い営みの内に（再録）

京都府亀岡市 林 修 三

あふれる思いに何から書けばよいのか分からない

くなる。ここで「私ごときが……」と謙遜してみても始まらない。こういう場を与えられた事を喜び、同時にそれを書き表す事の出来ない己の才能のなさを悲しむのみである。

一日の移ろいは陽の光彩、空気の匂いで量る事ができる。又、四季のうつろいも雲の流れ、木々の変化、温度の変化で感じ取る事が出来る。

それは人生の齡を重ねてゆく事の内にも当て嵌まる。そこに神は書物や、人の教えではない偉大な真理への気付きを、人に与え給う様に感じ入る。そして悟る事に鈍い私達にも、人と霊と共に生きる一如の世界の理を現界にて感じ取る事が出来る様に「大倭あじさい邑」を与え給うた。

戦後五十年、新宗教、新新宗教と「宗教」の名を冠し、続々と出てくる。人を、人類を救うと称する各団体の仰々しい程の活動に比して、ひっそりと大和の片隅に現世の生活を営んできた大倭の人々の暮らしぶりは如何にも印象的であり、様々な示唆に富んでいる。私は何も身勝手に大倭を美化する気は毛頭もない。ある意味では実に人間臭いその大倭五十年の営みの内に、新しい真の意味での現界と霊界との和合した生活を見るのみである。義理も人情も、醜さも、非情も、美しさも一如のこの世の理に生き、哭き、笑う人の世のその生き様を見直すのみである。とにかくも今の私は、大倭の地に立ち、法主さん、母さん、日元さん、そして大倭に縁ある方々にお会い出来るだけで心癒される思いがしている。

この世に於ける自分なりの、人生を問い続けた長い試行錯誤の後での「大倭あじさい邑」の発見は、本当に幸いな事であった。直接、間接的に此処へと導いていただいた凡ての方々と、霊人達に心から感謝したい。力み、迷い、ひたすら自己の拡大を計り、その重みに苦しんだ日々は、決して

私人だけの経験ではない事と思える。魂の旅を続ける凡ての仲間達に、「大倭あじさい邑」への来訪を切に願う次第である。

大倭暦五十年、誠におめでとうございます。そしてありがたうございます。

なりなりて なりなりひびく 宇宙音

今 縁側の 虫達に聞く

平成五年 十二月二十八日

身のひきしまる思い（現在）

30年前の1月の月次祭の折、その頃私の中国語塾で事務員をしてきていた三宅淳之君が、それに参加し、ここで見聞した事を私に話してくれた。法主が泣かれていた……と。最初何のことが皆目わからなかったのだが、よく話を聞いてみると、1月号の『おおやまと』紙に掲載された9人の方の文章を読まれ感動されたとの由だとわかった。9人の中に私の文章も入っていた。あまりのことにそれを聞いた私自身も感動で胸がいっぱいになった。あれから何度その方々の文章を読んだことだろう。

その度に身のひきしまる思いがする。法主はこれらの文章を大倭のお経として読んでほしいと言われる。私の書いたあの文章は私にとって初めて『おおやまと』紙に載せていただいた文章だった。あの頃、京都府亀岡市に住まいしていた私は大倭と縁を結んでまだ日も浅かった。したがって文章は、かしまった上段に構えたような内容だが、書くことには選ばれて何とかそれに応えようとする真摯な態度だけは見え隠れしている。いずれにしても9人の方々の文章を何度も読み、法主がその中の何にあれほど感動されたのかを少しでも読み取りたいという衝動は今も続いている。

地下 水 (再録)

法主 矢追日聖

法主様がかつての機関紙『大倭』の「地下水」というコラムで書かれた文章を、今年の本紙6月号に続き本号でも再録させていただきます。

再録にあたり読みやすさに配慮して、掲載当時の原文にある旧字体の一部表記を適宜改めていきます。(編集部)

率先宗教家から島国根性を捨てよ

昭和30(1955)年11月1日号より

「世界人類永遠の平和」はいかなる宗教にも共通する目的である筈である。がしかし日本の各種宗教団体の在り方を良心的に見ればそのほとんどがこの線から遠ざかっているように思われる。各団体の主導者たちの間には時々宗教会議などを開催して、凡そ信者たちの躍らないような位置から躍らせようと声を張り上げて太鼓を叩いていることも目につく。誠にありがたいことではあるがこれは一部の団体であるだけに寂しき感があるのであるが、我々として願うところはこうした運動が上層部識者たちに限られた道楽じみたものでなく、逆に信者たちから盛り上がり、信者と信者が異教同心の結合によって、こうした運動を我が日本から世界に向かって力強く推進して行くように真面目に育成してもらいたいことである。

宗教は自己を正しく知り正しく見て、人間完成へ、一步一步と近づけて行く役割をもつ、すなわち自己を治める所から出発して行く。これに先立つて大切なことは、宗教家自身が宗教家たるの真の資格を保持する必要がある。聖業と企業の境界すら分からないようなグウタラな宗教家の多きことに今更ながら驚かざるを得ないのである。

△

現今各種の宗教が乱立しているために、かえって善良な無知な人々を更に迷わすこととなる。最近我が大倭を訪れてくる大多数は、一応はだまされ不平をもっている。それに加えて曲がりなりにも下手な教理を少々かじっているのでもどうも始末が悪い。この種の人々に正しき宗教的認識をもたせることの困難は言うまでもないところである。

現在の社会的状況のもとにあつては、信者は宗教の本質的な内面に触れるよりも外見に魅力を持つ。そして宗教を求める目的は、どこまでも個人の一方的な欲求の満足にあるようである、実利的な方向へと走る。

信者は広大なる殿堂を構え、多く信徒があればその宗教はありがたい立派なものなりと信ずる軽薄さがある。この現代人の心理を巧みに捉えて寄付を強要し、まず第一に立派な殿堂を造ることに専念する。更にまた強制的に信者の獲得を信者に申し付け、その裏付けとして、一人の信者を得れば先祖が浮べれるとか、また子孫のための功德になるとか、最も極端なものになると何人作れば病気が治る、あるいは金がかかるといふふうには巧妙な手を打っている。なお、関西においてよく見かけることだが、信者一人を獲得すればその紹介料を出す。また護摩木の売りさばきや、寄付等の世話人にはその何分かの謝礼金といった具合に至極要領のうまい組もある。もし宗教が企業であるならば、これらの行き方は誠に時代即応の模範と言わなければならないのだが。

△

ある医者「最近では医者が患者に強姦される」

と評された。それは医者がまだ診断しないのに、患者から病名を宣して注射、薬の指示要求があるとの意らしい。宗教家の場合もこれによく似通ったところがある。けれども宗教家には、宗教として外すことの出来ない線があるはずである。いかに信者の総意といえども、もしそれが宗教の線に添わない場合はやわらかくそれを否定しながらその線に持つていくように導く強い意志が必要である。

特に教団の運営の問題になれば、己が宗教家たるの自覚を失っている場合が多い。簡単に言えば、信者一同の意見に任せておけば金も集まるし、信者も増すからとそれに迎合していく。

ここで宗教家に反省を求めたいことは、まず過去の日本人的な島国根性を無くすることである。我が宗派とか、我が教団というその自我の念を忘れることである。日本の全宗教家が各々持つ自己の宗教性の特徴を生かしながらその方向を一般に悩み、迷える社会大衆に向けそれらの人々を助けながら世界人類が互いに平和になるように導かなければならない。教団対教団の対立や、優劣を競うていような今日の宗教界に、真の宗教が在れば不思議である。こうした空気を作つたのもこれ宗教家の責任にある。

最後に言う、日本宗教が世界的宗教の線にまで達しようとするれば、宗教家が率先して、社殿、信者、賽銭等に執着せず、また他宗教を敵対視して信者の争奪戦を展開するような肚の小さい好戦的精神を抹殺してほしいことである。

むだ言が多すぎる

昭和32(1957)年8月1日号より

遠き親類より近くの他人とか、向こう三軒両隣

りとか言って古くから近所隣は身内以上に親睦を図り、急な場合は助け合うように言い慣わしてきた。一見すれば至極うるわしい伝統習慣ではあるが、更に一步踏み込んでみれば、それは単なる「つきあい」、儀礼的なうわつらばかりの誼みに流れ、真实性を欠いている場合が多いようである。せめて隣近所だけでも信用をおける真实性のある環境を作りたいものである。もちろん社会全般がこうあるべきことを望むのであるが。

△

ここで注意することは、「針小棒大」とか「一斗が八斗」という俚諺があるが、これは世間の話はずだ言が多く出鱈目が多いいことを指している。実際問題として考えた時、自分の言い出しただことが回りまわって自分の耳に入った頃はほとんどないことになっている場合がある。「誰が言

大倭会文化行事報告

文化行事 五七五

京都市 三宅 淳之

今回の大倭文化行事は親子3人で参加させていただきました。翌日、林修三先生から電話があり、「『おおやまと』紙に参加した感想を書いて欲しい」との依頼を頂きました。楽しい文化行事だったものの感想文を書くのは少しためらいがあり、その旨を伝えると「和歌でも短歌でも五七五でも短文でも何でもいから」とのことでしたのでヤケクソで書いてみようと思います。

京阪五条駅で皆さんと落ち合い、てくてくと六道の辻へと向かいました。いわゆるこの世とあの世の接点とされる所だそうです。正直、靈感というものが全くない私にはいまいピンとこなかっ

うた「いや、そんなこと言うたおぼえがない」とかこうしたこと隣近所が醜い争いをしていいる情景をよく見受ける。これが原因となって日々のことごとくに相反目し根にもって不愉快な日を送らねばなるまい。

これは一般論になるが、日本人の多くは人から話を聞き、また話すのが好きであるのに人格向上といった真面目な話し合いは案外少ない。特に人の汚点や人を罵倒する種類の話にはすばらしい花が咲く。これは社交の一つと言われるかも知れないが、社会的教養の低さを自ら示しているもので恥すべきことだ。この点は大いに憤んでもらいたい。また人から聞いた話を何の批判もなく丸飲みにして更に自分の思惑も付け加えて他人に話すことも大いなる社会悪であることを再認識してほしい。

令和6年6月16日

たです。でもそこで林先生は皆に歴史的背景などを一生懸命に説明されていたのを思い出し一句捻ってみました。「よく喋る林先生楽しそう慄く三人隅に隠れる」。それからしばらく歩き法観寺に着きました。前世で法主様の叔父にあたる方と縁のある木曾義仲さんの首塚のある場所へ皆と行きました。

文化行事は法主様も来られているそうなので、ここで一句「霊界と現界繋ぐ心の結び 重なる手と手縦横の糸」。そして清水寺の田村堂へ。征夷大將軍の坂上田村麻呂さん夫妻を祭つてある田村堂と、阿弓流為さん母禮さんの碑は直線距離では非常に近いことを初めて知りました。「霊界での距離はどうなんだろう」と思ってみたもの、そんなことは私には分かるわけがないです。ただ阿弓流為さん、母禮さんの碑のそばでニコニコする

林先生を思い出し一句「授業より林先生嬉しそう共に喜び還元帰一」。文化行事の最後の方に、参加された皆さんと一緒に林先生の若い頃の職場に行きました。そこで一句「修三五条七条と思ひ出します五七五 我が青春の教会へ皆と一緒にいったらば 過ぎゆく時の早き事 幾多の修行のその先に法主に会えた喜びを 皆と一緒に分かち合う」といった感じでした。行事全体の感想は、「幾重にも重なる辛き想い馳せ 顕幽不二と寄り添う法主」「かみのまにまに集いし人が時のまにまに響き合い 法主の息吹を感じる行事」といったところでしょうか。

心の紫陽花

三宅 博子

私は京都で生まれ育ちましたが、六道の辻や珍皇寺にお参りしたことはありませんでした。

京都では先祖の霊を「おしよらいさん」と言い、お盆には、おしよらいさんをお迎えしに六道珍皇寺へ行く人も多く、どんなところなんだろう?と思っていました。今回の文化行事で訪ねることが出来て良かったです。

「おしよらいさん 恐ろし怖いと 縁がなく初めて行った 六道の辻」

そこから東大路通りを横断し法観寺、清水寺と行き、参加した皆さんと一緒に昼飯をいただきました。

「活き活きと 法主と共に ランチ会 お喋り 集まる九人」

そして最後に豊国神社、耳塚に行きました。耳塚とは豊臣秀吉が朝鮮出兵のにおりに殺害した朝鮮人の耳や鼻を塩漬けにして持ち帰り、埋めてある場所です。そこで黙禱をしていると、たまた

まそこに居合わせた韓国から来た人に話しかけられました。

「日本人がここに手を合わすところは初めて見ました。どういう気持ちでここに手を合わせているんですか?」と聞いてこられました。私は突然聞いてこられたので、どう答えればいいのか躊躇してしまい、そこで何も言わずにいたのですが、心の中では「日本人とか韓国人、朝鮮人とか関係なく、人としてこんな酷いことをしてはいけませんよね。どんな気持ちで亡くなられたのか、またどんな気持ちでここに眠っておられるのか。一人一人の命は尊いものなのに、軽々しく奪うなんて人間として本当に申し訳ない、そういう気持ちで手を合わせていたんです」と言いたかったです。「国籍も 生まれも育ちも元一つ 共に仲良く現身同士」

今回の文化行事に参加した感想は、「しやば娑婆の世で 見つけた涅槃ねはん ここにあり 心に映る紫陽花の花」です。

大倭の文化行事に参加して

三宅 惇

僕は大倭の文化行事には初めて参加しました。以前禊会に参加させてもらった事がありますが、正直言って何のことかさっぱり分からず会話に入っていけませんでした。それに比べると文化行事は禊会と違って、一緒に行っている場所の話題が多いので、禊会よりも話しがしやすくて楽しかったです。

僕は日本史はそれなりに知っているほうだと思っ
ているのですが、林先生の知識量にはびっくり
しました。「知識の量 林先生すぎすぎる! 初
めて知った こんな人とは」。それから最後に七

条の耳塚に皆さんと一緒に参りました。そこで僕が黙祷していると、たまたまそばにいた韓国から来た人が喋りかけてきました。最初は僕に向かって「すみません」と声をかけてこられたのですが、僕は「黙祷中に話しかけるな」と思っ
てしまいましたが、僕らの了解もなしにスマホで動画を撮っていたことです。動画を撮られること自体には抵抗感はなかったのですが、「動画撮っていいですか?」など一言もなしに勝手に撮影されていることが少し不快な気持ちでした。そんなことを考えながら黙祷を続けていると、その韓国人の方は僕ではなく藤本さんに話しかけられました。その時の僕は「僕が的確に答えなかったから藤本さんに迷惑がかかる」と不安になった反面、「藤本さんなら的確に答えてくださるのではないか」という期待もありました。すると韓国人の方が藤本さんに対して「どういった目的でここに来られたのですか?」と質問を投げかけました。すると「いろいろな歴史はありましたが、みんな仲良くしたいと思い、手を合わせました」と答えられました。その時僕は藤本さんの言葉遣いと、対応を見てこんな考えができる大人になりたいと思ったと同時に、聞かれてすぐ答えることのできる藤本さんに脱帽する思いでした。そしてもう一人脱帽する思いを抱いた人がいます。それは僕の父です。僕と父はいつもふざけ合い、関節技をかけられ、時には殴りあうこともしばしばあります。尊敬できる点はたくさんあるのですが、最近父の言葉に全く重みを感じなくなっていました。しかし、

耳塚のことについて詳しく韓国人の方から聞かれると、自らが七条に住んでいたからこそその知識を使い、歴史が得意な僕ですら知らないような知識を丁寧な言葉遣いで説明していました。それは、

2024年 サマーキッズキャンプ報告

2024年7月19日(金)～21日(日)の期間で、大倭・交流の家にて第2回目となるサマーキッズキャンプを開催させていただきました。累計参加者は大人10人・子供8人、下は0歳児から上は82歳という世代間交流の出来るキャンプとなりました。

大きなプールでの水遊び、スイカ割り・流しそうめんには花火。虫取りではクワガタを3匹も捕まえ、セミの羽化を観察するという大倭の自然を生かした体験がたくさん出来ました。また、21日には大倭のお掃除のボランティア活動を行い、子供達も一生懸命落ち葉集めを行いました。子供達は朝から晩までフルパワーで大はしゃぎし、騒がしかったでしょうが、近隣の方々に子供達の声が聞こえて嬉しいと言っ
ていただき、大変ホッとしました。来年も開催したいと考えておりますので、よろしくお願
いいたします。

FIWC関西委員会 伊垣有紀恵



いつも関節技をかけられてウザいなど感じる父とは全く違う、真面目で誠実な父の姿でした。僕はそんな父を見て見習わないといけないところはたくさんあるなと感じました。最後に、家に帰る道中で藤本さんと李さんと父が同い年であることを知りました。そう思うと父ってかなり老けてるなと感じました。よっぽど僕を育てるのに苦労をしたんだなと胸が痛くなりました。こんな親子3人ですが、皆様今後ともよろしくお願
いします。

三三賑栄い塾報告

われわれは水脈を求め
掘り続ける井戸

野本 三吉

今年の5月25日(土)から26日(日)にかけての2日間、本場に久しぶりに「ミニ賑栄い塾」が行われた。会場や準備の関係もあり、今回はごく少人数で行うことになった。

テーマは「さて、どう生きようか」とした。

会場は大倭紫陽花邑。岸田哲、杉本順一、高橋良美、林修三さんなど大倭の皆さんが準備をしてくれ、参加者は16名ということになった。

大倭紫陽花邑の周辺には広い道路もゴルフ場もあり、近代的な街になっていたが、一歩邑に入ると懐かしい原風景が広がりホッとする。

賑栄い塾の始まりは、1996年に阿木幸男さんが呼びかけ、早稲田奉仕団で行われた。人数も増え、宿泊もしたいという意見が出て、その第5回目は大倭紫陽花邑で行われることになり、真木悠介(見田宗介)、山尾三省さんをゲストに迎え、この時から「賑栄い塾」の名称が定着した。以来20年余と、全国各地で行われてきた。

内容も充実し、楽しい交流会であったが、会員も多忙となり、準備も大変なことから休むことになった。その間、やりたいという声はあったのだが、会員の生活や身体にも変化が大きく、中でも見田暎子さんが亡くなられたことは大きかった。そこで今回は、ごく少人数のミニ集会とし、今後このことも検討することにして開会された。会合は1日目の午後に会員の近況報告から始まった。編集者と医療従事者となった永仮姉妹。新たに

音楽活動を始めた菅井勇紀、斉藤麻希さんのコンビ。娘さんと離れて久しぶりの一人旅となった水島照美さん。鍼灸師として活動している李章根さん。出口王仁三郎研究に集中する出口三平さん。中国語塾38年の林修三さん。水保生活44年、弟さんと秩父とも関わり続ける高倉敦子さん。神奈川からの4人組、高橋健一、大木章弘、日下部洋一さんとぼく。高橋良美さんは、大怪我の後、治療を経て大倭に戻り、今までのように大倭を支えておられる。そして、大倭に来て50年目という岸田哲さん。イスラエルの厳しい状況に悩んでおられた。

近況報告が一巡した後、杉本順一さんとの対談が行われ、ぼくは初めて杉本さんの子供時代を伺うことができた。1961年に同志社大学に入学し、学生運動の激しい対立の中、大倭のボランティアとして関わるようになり、法主さんとも出会い、柴地則之さんたちと大倭に参加することになる。

その時、法主さんから「宗教は信じたらアカン。否定から入れ」と言われ「自分の中で否定しきれんとこまでいったら、それは信じるんでもないし、疑うでもない、そういうところへ行くまで、それを貫かなアカンで」と言われたという。

その後、大倭での生活を続け、法主さんが亡くなる日を迎える。通夜の日、お送りするため龍神さんの所へ行き、そこでハッキリと霊界からの声が聞こえたというのだ。それから1年ほどして、杉本さんは頭部の血管3ヶ所が破裂し、入院することになった。言葉も出なくなり、人の名も浮かんでくなくなり、あまりの辛さに「このまま死なしてください」と祈ったという。すると「お前は生きてやれ!」という声があり、1ヶ月後には奇跡的に回復した。

この時は心から素直に聞く気になったという。杉本さんは淡々と話されているのだが、ぼくには地底深くから響いてくる気がした。

さらに杉本さんは、今回のミニ賑栄い塾の2週間前に「白紙の委任状を持って生きよ、条件付けて生きるな」と法主さんから言われたという。

ぼくには「白紙の委任状」とはありのままの自分を信じられるのかと問われていると感じた。この日の夜、水島照美さんの流れるような唄と、菅井勇紀、麻希さんの影絵と音楽を聞き、場所を「交流の家」に移して、明け方まで語り明かした。翌朝早く、東方の碑の前で参加者と会い、「この世の中の全ての生きもの、植物も土も水も、地球さえも心を持っているのではないかと思う。その心人間は受け止めきれなくなっているんですね」という話を聞いた。

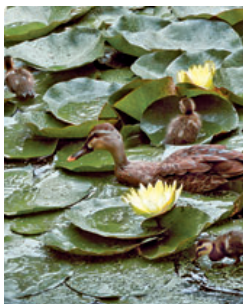
その日は、交流の家で朝食を食べていて、自然に話が始まったのだが、ぼくは、東京の山谷にいた時に見た東京大地震の夢から、沖繩へ行き、比嘉ハツさんを中心としたノロの方々と出会い、自然との交流を経験した話や、10年ごとに仕事が変わり、再び沖繩へ行き14年もの間、暮らすことになった話をしていった。

その後、さまざまに話は展開したが、古代の人々は霊界と現界との両方の思いを受け止めて生きていたのではないかという気がした。

6月に入り、真木悠介さんのやっていた「樹の塾」の方々の学習会があり、そこでぼくは「われわれとは水脈を求めて世界を掘り続ける井戸である。われわれとは、それぞれの場で同じ探求を行う無数の井戸である」という真木さんの文を見つけた。賑栄い塾とは、泉を掘りつつ交流するつながりなのかもしれない。今後も、小さな集まりを持ちつつ、無数の泉をつなぎたいと思っている。

あじさい日誌

7月7日 午前8時から大倭墓地の掃除が行なわれました。
 7月12日 午前10時から日頃大倭会館で活動されている方々が同会館の大掃除をされました。鏡池に今年2度目のカルガモ親子が顔を出してくれました。



7月14日 大倭会主催視察が大倭拝殿において開かれました。大阪市の河岡ほずみさんが2回目の参加をされました。
 7月15日 午後2時から大倭神宮の月次祭が行われました。

この日は大雨予報もあつて、社務所内での祭典でした。
 7月19日〜21日 交流の家で昨年に続きサマーキッズキャンプを開催。(6頁参照)子どもたちは紫陽花邑にある土師部の杜のお掃除を手伝いました。
 7月23日 午後2時から大倭大本宮拝殿において月次祭が行われ、昭和38年7月23日の法話をお聞きしました。

午後4時から大倭会館において大倭会役員会が開かれました。

た。(次号で報告します)
 7月28日 午後4時から本紙の編集会議が教務本庁で開かれました。

8月4日 午前8時から大倭墓地の大掃除。9時から紫陽花邑の大掃除が行われました。80名近い方々が参加してくださいました。前日まで猛暑の日々でしたが、この日は薄曇りの時間も

頂いて熱中症の方もなく大半の方は午前中で無事掃除を終えられました。ありがとうございます。
 8月5日 午後5時から本紙の編集会議が教務本庁で開かれました。

8月6日 午後2時から大倭神宮の月次祭が行われました。

広島原爆の日。午前8時15分、拝殿の太鼓が李章根さんによって打ち鳴らされました。午後6時半から大倭会館で倭の会が開かれました。

大倭会館では
 7月12日 午後2時から中堅職員研修会をオンライン研修にて2回目を開催しました。

(菅原園)
 7月17日 午後からおやつ作りでアイスクリームサンデーを作りました。暑い中、冷たくても喜んでいただきました。
 8月2日 午後から日本昔話の朗読CDを聴きました。笑いや涙される方もおられました。

(須加宮寮)
 7月16日 書道クラブの活動

行いました。お手本より字が小さかったりすると、先生に「次はお手本の大きさを書くわ」と話す方もおられました。

7月30日 音楽療法を行いました。「祭り」という曲で鳴子を鳴らして歌いました。

(長曾根寮)
 7月7・26日(特養)七夕の大判の絵にご利用者と職員が一緒に飾り付けをしました。
 7月15・25日(デイ)作品づくり。この日は朝顔の立体的な置物を作りました。

(茂毛路園)
 8月7日 お誕生会で6名の方のお祝いをしました。紅白饅頭やいちごショートケーキを提供させていただきました。

(八重垣園)
 7月は毎日音楽を聴いたり歌ったりしていますが、久しぶりに脳トレを行いました。

あんない

*月次祭(大倭神宮)
 9月6日(金) 午後2時より大倭神宮にて。

*大倭会主催視察
 9月8日(日) 午後2時より大倭拝殿にて。

*月次祭(大倭神宮)
 9月15日(日) 午後2時より大倭神宮にて。

*月次祭(大倭大本宮)
 9月23日(祝・月) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

表紙写真によせて

母と買い物に行き、車を降り、空を見上げるとハッキリとした入道雲が目に残り、思わずシャッターを切りました。夏の雲は冬の雲と比べて、力強くハッキリしているので好きです。
 (青山美子都)

お詫びと訂正

本紙7月号7頁のガラス乾板から現像した3枚の写真の内、左下の女性4人のものが、表裏逆になってしまったため、和服が左前になっておりました。お詫びするとともに訂正させていただきます。
 (編集部)

大倭会文化講演会

日時 令和6年11月10日(日)
 午後2時~4時30分(開場1時30分)

場所 大倭拝殿 **入場無料**
 講師 栗原 俊雄 氏(毎日新聞 学芸部専門記者)

「戦没者遺骨の戦後史~未完の戦争」

第2次世界大戦中に海外で、行方不明のままになっている日本人戦没者の遺骨は100万體以上。講師の栗原俊雄さんはご著書の中で「敗戦から80年近くが過ぎた今も亡くなった肉親のことを忘れられない人たち、遺骨を探し続ける人たちがいる。……私たちの社会が、『終わったこと』と誤解している戦争によって、今も苦しんでいる人がたくさんいる。その事実を広く伝えること。…その人たちの、ささやかでも力になること。そして戦争が起こると被害は庶民に広く長く深く及ぶことを知ってもらうことが、新しい戦争を防ぐことになること」と語っている。

プロフィール:1967年生まれ、第2次世界大戦の元兵士や遺族への聞き取り、戦後補償裁判の傍聴や戦没者遺骨の調査・発掘に加わり報道。「戦闘が終わっても戦争被害は終わらない」と、「未完の戦争」の実態を訴えている。『東京大空襲の戦後史』『硫黄島に眠る戦没者一見捨てられた兵士たちの戦後史』など著書多数。

